110学年度第一学期 Eurasia 基金会国際講座

「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」系列講次(12)

講題：歴史、記憶と日本のメディア　：NHK朝ドラの分析

Eurasia 基金会国際講座第 12 回は、本学日文系黄馨儀副教授による「歴史、記憶と日本のメディア：NHK 朝ドラの分析」である。講義はまず本人の研究の出発と領域転換の話から始まり、学生たちに海外留学経験について語った。そしてメディアと社会の観点から自身が行ってきた NHK 朝ドラ研究、その系列の起源、転換期、特色を紹介し、さらに劇中で描かれる戦争が呈する歴史の記憶へと話を進めた。

黄教授は最初に自分が日文系から領域を広げた学術経験に言及し、学生たちには在学中に積極的に専門的研究計画に参与し、研究の基礎を養うこと、自身の日本とアメリカの留学経験を紹介して、留学を目指すことを鼓舞した。その後、朝ドラはすでに放送開始 60 年であり、テレビの「連続小説」という命名は新聞の「連載小説」の形式と関連すること、毎朝午前の 15 分間放送という独特の形態も日本特有であることを述べた。教授の研究では朝ドラは 5 期に分けられる。第 1 期（1961-1974）の草創期は文学作品が多く、1966 年の『おはなはん』放送後に朝ドラの「女性一代記」路線が確立され、家庭劇と並ぶ二大テーマとなった。第 2 期（1975-1988）は平均視聴率 40％の高さで、明治大正昭和を背景にしたヒロインの戦争体験ものが多い。第 3 期（1989-2000）と第 4 期（2001-2010）は時代の動きに合わせ、物語の主軸は現代女性の夢、恋愛、地域起こしへと変わった。第 5 期（2011-）は王道路線の女性一代記へ回帰している。朝ドラの重要性は「日本の共同文化を育む」と讃えられたメディアを知ることができる点にある。黄教授の指摘によると、現存の映像とテレビ情報誌の分析から、この系列の劇中で戦争作品の割合は各期それぞれ 42％、84％、28％、14％、63％になるという。メディア学の手法を用いてテレビドラマを研究する時には、場面(テキスト)分析、画面移動を記録する手法といった実証的方法で映像テキストを再現する。

講義の中で教授は次の区別を行なった。①1960-2000 年代の朝ドラ、②2011 年以後の朝ドラ、③2011 年以後の終戦ドラマで、この三つの分類をもとに劇中に現われた戦争と女性について説明した。黄教授はまた一部の作中に出てくる玉音放送等の映像を流し、聴講者に劇中の戦争表現を見せた。映像からは次のこと

を知ることができる。①1960-2000 年代の朝ドラ：女性の戦争体験はきわめて似通っている。多くは女性が男性の出征、空襲、避難に遭い、戦死の公報を受ける等、女性の銃後の守りを現わしている。ヒロインの戦争に対する態度は各年代で異なってはいるが、概ね反戦的で、特に 70-80 年代のヒロインが示す強い反戦的立場は一つの特徴である。②2011 年以後の朝ドラ：2011 年の『おひさま』には従来の反戦と異なり、長兄や学生の出征に賛成する人物像が登場する。2011 年後の作品で、黄教授は東京放送局（AK）と大阪放送局（BK）の制作に焦点をあて分析紹介した。2015 年以前の BK は強い反戦的立場を示していたが、2016 年以後は反戦のメッセージは徐々に薄れ、個人の幸福を強調する傾向にある。③2011 年以後の終戦ドラマ：女性を主人公とする終戦ドラマは多くが反戦的メッセージを発し、比較的地域における戦争体験を主とする傾向にある。以上をまとめると、朝ドラと終戦ドラマに現われる戦争には共通の特徴がある：

１. 銃後の守りとしての女性
２. 戦場の前線を描かず、一般庶民の苦難を描く
３. 男性不在のため、代わって女性が家庭の責任を担う
４. 女性＝反戦

朝ドラからメディアと社会の関係を見ると、とりわけ本講義では戦争を歴史記憶の焦点にして分析したが、各年代の作品の戦争への描き方が一定の割合で維持されていることがうかがえる。テレビに現われる「戦争」という歴史記憶は多重的意義を持っている。風化された戦争記憶は繰り返し新たに語られ、日本国民の共同記憶になっている。また戦後 70 余年が過ぎた今日、今なお朝ドラで戦争が設定されてはいるが、各年代の戦争の表現方法と変化も一つの重要なメッセージと見ることができる。質疑応答では、学生たちは積極的に質問した。なぜ朝ドラに頻繁に戦争が登場するのか？反戦のメッセージが日本国民に与える影響は？この題材は日本政府の政策と関係するのか？女性を主役とすることで日本女性の意識は高められたのか？日本文化の深層をどう解読するか等の質問が出され、熱心な質疑応答で講座は終了した。

(Web サイト: https://eurasia.pccu.edu.tw/index.php)
(撰稿: 黃馨儀・日文系副教授)
(日本語訳:塚本善也・日文系副教授)